様式４

平成２１年度　第２回学校関係者評価報告書

鳥取県立鳥取工業高等学校
校長　　山内　有明

評　価　日	平成２２年２月２５日（木）
評　価　・　提　言	学校の所見・改善策等
１．今年度の自己評価について (1)重点目標の達成状況 ○大切なのは、次年度の改善方策、具体的方策である。抽象的な表現ではなく、何をどうするのかとか、もう少し出しておくべきだ。例えば、一番上に「情報交換を行い、連携して学習指導にあたる。」となっているが、具体的にどんな連携があるかが見えない。	○意見を参考にして立案したい。 ○学習指導の内容等については、毎月１回教科会を設け、各教科ごとに指導方法などについて協議し、連携して学習指導するようにしている。また、生徒の状況については毎月１回学年会を設けて情報交換を行っている。
(2)説明・公表について ○いろいろな工夫をされるが評価がＣレベルでしかないということになれば、改善方策等のどこかに無理があるということだろう。アプローチの仕方や、子どもたちにどう取り組ませるのかという観点を､少し変えてみなければならない。	○目標を周知徹底を図るとともに、適宜、チェックするなど改善を図っていきたい。
２．学校運営への提言 ○「資格取得」の計画は、特定の職員の負担になっている。職員研修に出して力量を高め、繁忙の度合いを分散する必要がある。	○それぞれの職員に得意分野があるので、「この分野はどの先生にも負けない」といった自負心を各教員が持つことが大事である。そうすることが教えることの自信にもつながる。
○重点目標で達成できたものは省いていき、本当に何を目指すのか的を絞って進めてもらってもいい。	○整理していきたい。
○核家族が多くなっている中、未成熟な子どもを教育しなければならないが、まずは家庭教育から取り組んでいかなければならない。学校生活を送るなかで先生方がフォローしてやればいい生徒になる。	○たえず、望まれる教師像を模索しながら、指導の充実を図りたい。

○高校３年間は一人の人間をどれだけ成長させていくかということである。中学から社会への通過点に高校がある。高校は中学校に対して人的なパイプで情報交換できているか、社会に対して人的な交流や人脈が確立されているかを含めて、中学、高校、一般社会という、そこに道筋を確立することが大事である。	
○最近の若者は発想が一人称であり、自分の個性を他と協調させた、ろ過した形での意見発表ができない。高校教育では、いろいろなテーマを持って教えることも大事だが、その前に「人間づくり」を目指し、一人称的な発想を壊してやることが大切だ。また、「協調性、人間社会とはこういうものだ」という教育も必要ではないか。	○人格形成を目指した人間教育の視点で、教育活動に取り組んでいきたい。
○高校入試で合格平均点が下がった上に、募集人数が少ない。鳥工には理数工学科が１クラスあるが、クラス替えはなく、構成員が固定化される。工業学科から勉強が面白くなって進学したいといった生徒が、スキルアップできるようなクラスがあってもいい。	○東部地区で国公立大学に進学しているのは東、西、八頭の次は本校であると認識している。しかし、このことが中学校に周知されていない。今後、情報発信しながら、根本的な掘り起こしを行い、鳥工の魅力を発信していきたい。
○工業高校は歴史と伝統があり、資格や技術を持った人材を輩出してきたという歴史があるが、ニーズが変わり、社会が変わってきたら、それに順応できる準備はされてもいいのではないか。	○高校主動で社会の変化に対応した学科改編は難しい面があるが、地元企業からの意見などを参考に、教育内容の充実改善に努めていきたい。
○基本構想の狙いは非常に大事なことである。職員一人ひとりがビジョンや展望を持つ、そのことで責任ある決定ができるものであり、そこまで来ているという意味で評価したい。	
○「ものづくり道場」的な活動の実施は非常に大事である。これができるように、工業の全職員を顧問にすればいい。部活動指導の手当ても出、小学校や中学校向けでもでき、学校に魅力づくりになる。	○引き続き取り組んでいきたい。